

柏木学園ニュース

URL <http://www.kashiwagi.ac.jp/>

平成 23 年

11 月号

No.83
奇数月発行



陸上競技大会 柏木学園高等学校



校外研修旅行 柏木実業専門学校



全関東野球大会 大和商業高等専修学校



運動会 都筑ヶ丘幼稚園

あたりまえ (日常の^{さじ}瑣事)

柏木学園高等学校 校長 保田 完次

「あたりまえ」というこんな詩があります。

あたりまえ、こんなすばらしいことを
みんなは なぜ よろこばないのでしょ
あたりまえであることを
お父さんがいる お母さんがいる
手が二本あって 足が二本ある
行きたいところへ 自分で歩いてゆける
手をのばせば なんでもとれる
音がきこえて 声のでる
こんなしあわせあるのでしょ
しかしだれもそれをよろこばない
あたりまえだと笑ってすます
食事がたべられる 夜になるとちゃんと眠れ、
そして又朝がくる、空気を胸いっぱいにする
笑える、泣ける、さけぶこともできる
走りまわれる、みんなあたりまえのこと、
こんなすばらしいことを、みんな決してよろこばない
このありがたさを知っているのは
それを失くした人たちだけ
なぜでしょう あたりまえ

この詩の作者 井村和清さんは、悪性腫瘍のため大腿部を切断し、37歳で亡くなった医師です。あたりまえのことができなくなってしまった人だけが、あたりまえにあること、できることの大切さ、喜びを知っている、という作者の叫びが胸に痛い。あたりまえの事に対する喜び、感謝を感じることに鈍くなっている一人に自分もいるからです。

昨今、あたりまえの事に感謝する心や素晴らしいと思う心が、全体的に鈍くなってきているのではないだろうか、という思いがありました。それが、3月の東日本大震災を境に様相が変わってきたように思います。いろいろな人々の言動の端々に「あたりまえの事」や「あたりまえの生活」の大切さ、それに対する感謝の思いがにじみ出ているように感じるので。やはり井村さんの詩にあるように、失わないと思ひ出されえないものなのではないでしょうか。日頃からそっと大切にしていたいものです。

そのためには、進歩や発展がないと言われればそれまでですが、“分を知る”“現状を認める、満足する”ことがないと、「あたりまえ」の事に感謝する心は生まれれないのではないかと考えます。「遺伝、境遇、偶然、我々の運命を司るものは畢竟(つまり)この三者である」と芥川龍之介も言います。むろん異論はあるでしょう。が、「あたりまえ」に感謝の念を持つことのスタートは、案外こころへんにあるように思うのです。「感性を磨く」ことと併せて...

うかうかと 咲き出し この帰り花(虚子)